



9月21日(金)6限に、島根大学教職大学院の中村准教授に、3年生の世界史クラスで師範授業をしていただきました。このクラスは、昨年度初任者研修を受けた井上教諭が受け持っているクラスです。今回は、フォローアップ研修も兼ねて、このクラスを選びました。あわせて、本校の初任者研修対象者、全てのフォローアップ研修対象者、さらにその教科指導員やペア・サポート教員についても、この授業の参観を悉皆としました。また、授業研究については、Ⅰ部は全教員の悉皆研修、Ⅱ部は授業参観者を対象とした研修としました。昨年度の御園准教授の師範授業同様、学びが多い研修となりました。

【師範授業の学習指導案(抜粋して簡略化(一部改編)してある)】

1. 題材 アジア・アフリカ地域の民族運動

2. ①本時の目標

- ・第1次大戦後、東アジアで起きた民族運動の内容、背景、影響を理解する。
- ・理解したことを表現する。
- ・Q1～Q4まで全員クリアする。

②本時の展開

	学習の内容	生徒の活動	指導上の留意点
導入 3分	本時の説明	・授業の目標の明示 ・授業方針の説明	どのような力を育てたいのか。なぜその力が重要なのか。
展開 42分	学習内容の解説 (7分)	・教師の説明を聞く。適宜メモを取る。	・なるべく簡潔に。 ・本時で何を学ぶのか概要が分かるように。 ・解説の中で生徒たちが何に取り組むのか分かるように触れていく。
	問題演習 (35分)	・協働的に学びあい、教えあう。 ・教科書、資料集、友人の意見を参照しながら問題に取り組んでいく。 - Q 1 : 経済発展を促す構造を学び、現代社会の問題も分析する。 - Q 2 : 既習事項を振り返り、既存の知識を活用しながら文学革命の背景を理解する。 - Q 3 : 文学革命の概要を体系的に理解し、何が問われ、何を表現するのか判断して記述する。 - Q 4 : 五・四運動について、因果関係を明確にして説明する。既習のヴェルサイユ条約や Q 3 と結びつけ、知識を体系化させて理解していく。	・教師は生徒の様子を見ながら、個人として、集団として最善を尽くすことが出来ているのか分析する。 ・停滞している生徒には個別対応。 ・生徒が全体的に停滞している場合、全体に対してヒントや課題の解説(答えを言うわけではない。全体が停滞している場合、課題が悪いことが多い)。 ・質問に答えたり、論述の添削をする。
整理 5分	まとめ	リフレクションシートに記入。	・個人の学びを振り返る。その日学んだことを記述。また、学習に向かう姿勢などを自己評価する。 ・教師からフィードバック。

③評価

- ・第1次大戦後、東アジアで起きた民族運動の内容、背景、影響を理解できた。(知識・理解)
- ・理解したことを表現できた。(思考・判断・表現)
- ・Q 1～Q 4まで全員クリアできた。(関心・意欲・態度)(技能)

～ Q 1 及び Q 2 の詳細～ *時間的に実際の授業では、Q 2 までとなった。

教科書に「第1次世界大戦による列強資本主義勢力の後退は、東アジアに空前の好景気をもたらした。」とあるが、なぜ列強資本主義勢力が後退すると、東アジアの景気がよくなったのか。次の A～D のうち3つはこの時代にアジアの経済発展が起きたのと同じ構造で経済発展を遂げたものである。次の A～D の中から異なる構造の事例を1つ選び、なぜその構造が他と異なっていると判断したのか説明せよ。

★抽象的思考力（共通点、相違点の分析）

A<19世紀前半のフランス>

大陸封鎖令を施行した結果、フランスの産業は発展した。

B<19世紀前半のアメリカ>

米英戦争の結果、アメリカの産業は発展した。

C<19世紀後半のドイツ>

ドイツ統一後、保護関税政策をとることで産業が発展した。

D<19世紀末のロシア>

露仏同盟を結んだことでフランスから資本援助を受け、産業を発展させた。

Q 1 応用：最近ニュースになっている次の事例を見て、トランプ大統領がこのような政策を実施する目的を説明せよ。

★応用的思考力（ものの見方、考え方の転用）

<現代の米中貿易戦争>

アメリカのトランプ大統領は中国製品に対して高関税を課すことで、アメリカ市場からの締め出しを図っている。

Q 2：文学革命では「民主と科学」を掲げて儒教批判をした。この背景として誤っているものを1つ選べ。また、なぜそれが誤っていると判断したのか説明せよ。

★論理的思考力

- ①辛亥革命後、軍閥が割拠する混乱の時代になっており、根本的社会変革が必要だと考えたから
- ②儒教は孔子など古代の思想や文献を研究するばかりで、新しい科学的思想の発展を阻害しているから。
- ③儒教思想は支配者に従うことを強く求めており、中国人の奴隷根性を創出しているものだと考えたから。
- ④「中体西用」では科学技術や軍事技術が未発展だったので、民衆による科学技術力向上を目指したから。

この授業は、学習課題（Q）にむかって、生徒が学び合いという協働学習をしながら、その中で主体性を育んでいくものでした。中村准教授が校内研修で話された分類で言えば、A L 型授業（教師主導）<授業の中に思考力を駆使する場面がある>、A L 授業（教師→生徒へ学びのバトンを渡す）<教師の問題解説でなく、生徒たちが協働的に問題解決していく>、P B L（生徒主体）<問題設定から生徒が始める。自己調整的な学び>のうちのA L 授業に該当するものでした。

授業の最初に、「答えは教えません。問題解決の過程が学びです。」「質問はどんどんしてください。」「自分たちの導き出した答えを確認したければ来てください。」「論述問題は添削します。」「先生に聞くために列を作るのは時間の無駄です。」「時間内に1人ですべての問題をクリアするのはかなり大変です。」というような注意事項が説明されました。生徒は、学習課題（Q）を解決するために、個人で教科書等と向き合ったり、グループで話し合ったり、先生に質問に行ったりと、はじめて体験するこうした活動にも関わらず、主体的に動きながら答えを出そうともがく姿が印象的でした。

そうした生徒の活動を見守る教員のスタンスとして、中村准教授から次のようなことをご教示いただきました。『生徒1人1人の理解の速度、前提知識は全員違うことを意識する。』『待つことで生徒の力だけで答えにたどり着けそうか、何か支援が必要か見極める。基本は出来るだけ待つ。』『生徒の対話内容を聞く。生徒が互いに批判的に検証している時は大丈夫・・・例えば「でも、それって・・・」「何か違和感ない？」などの会話が聞こえる時。』『1人で黙々としている生徒も協働している生徒もどちらもOKと考える。』『生徒の変化を見る。集団としての変化、個人の変化など。』『目標達成のために動いているかどうか見る。』など

この師範授業や授業研究を通して、中村准教授の言われる「**学校化された学び**」、体系的な知識習得が目的とされ、生徒が教師が設定した目標に盲目的に従っているだけの学びであり、総括的な評価（中間・期末など点数）を重視する学びではなく、「**真正な学び**」、学習者が学ぶ価値を見出して主体的に取り組む学びであり、現在学んでいることがキャリアや社会と繋がっている学びであり、形成的な評価（プロセス評価、パフォーマンス評価）を重視する学び**がいかに大事であるか**あらためて確認することができました。

授業研究Ⅱでは、若手教員から活発に質問が出ました。今後のさらなる松江東高校の授業改善に期待したいと思います。